

生物学の哲学入門 修正表 (2017.12)

修正前	修正後
<p>8 ページ・17 行目： …下のレベルおける進化を…</p>	<p>8 ページ・17 行目： …下のレベル<u>に</u>おける進化を…</p>
<p>10 ページ・9 行目： …可能性<u>を</u>垣間見られるかも…</p>	<p>10 ページ9 行目： …可能性<u>が</u>垣間見られるかも…</p>
<p>19 ページ・下から 11 行目： …保存による種の起源』である。</p>	<p>19 ページ・下から 11 行目： …保存による種の起源<u>について</u>』である。</p>
<p>25 ページ・下から 3 行目： たとえば、条件③では…</p>	<p>25 ページ・下から 3 行目： たとえば、条件①では…</p>
<p>25 ページ・下から 2 行目： <u>実際</u>、ダーウィンは遺伝の仕組みについて誤解<u>さえ</u>していた</p>	<p>25 ページ・下から 2 行目： <u>また</u>、ダーウィンは③の遺伝の仕組みについて誤解していた</p>
<p>27 ページ・下から 3～2 行目： …下のレベルおける進化を…</p>	<p>27 ページ・下から 3～2 行目： …下のレベル<u>に</u>おける進化を…</p>
<p>37 ページ・下から 2 行目～38 ページ・1 行目： <u>チョウは成長にともない、翅の模様を斑点から縞、そして均一の色へと変化させる。この変化のパターンはチョウ以外の昆虫にもみられる。</u></p>	<p>37 ページ・下から 2 行目～38 ページ・1 行目： <u>チョウの種を進化過程と考えられる順序に並べると、翅の模様は縦縞、斑点、横縞、均一色へと変化するように見え、この変化のパターンはチョウ以外の動物にも当てはまる。</u></p>
<p>137 ページ・4～5 行目： …<u>ヘテロトピー</u>（異時性）、……<u>ヘテロクロニー</u>（異所性）と呼んだ…</p>	<p>137 ページ・4～5 行目： …<u>ヘテロクロニー</u>（異時性）、……<u>ヘテロトピー</u>（異所性）と呼んだ…</p>
<p>191 ページ・下から 12 行目： 速水格ほか編「古生物の科学」</p>	<p>191 ページ・下から 12 行目： 速水格ほか編<u>(1998-2004)</u>「古生物の科学」</p>

<p>194 ページ・21 行目： Eimer, <u>TH.</u></p> <p>201 ページ・2 行目： 4.3 生層序学における化石記録の<u>味方</u></p> <p>222 ページ・20 行目： ヘテロクロニー (<u>異所性</u>) 137,152,157</p> <p>222 ページ・23 行目： ヘテロトピー (<u>異時性</u>) 137,152</p>	<p>194 ページ・21 行目： Eimer, <u>G. H. T.</u></p> <p>201 ページ・2 行目： 4.3 生層序学における化石記録の<u>見方</u></p> <p>222 ページ・20 行目： ヘテロクロニー (<u>異時性</u>) 137, 152, 157</p> <p>222 ページ・23 行目： ヘテロトピー (<u>異所性</u>) 137, 152</p>
--	--

*以上、2刷修正済み

修正前	修正後
<p>35 ページ・コラム下から 4 行目と 2 行目： …<u>共通祖先</u>の仮説…</p> <p>46 ページ・コラム 7～8 行目： …それぞれの遺伝子の頻度が p と q であるとする。…</p> <p>47 ページ・コラム 2 段落目： …このように世代を通して遺伝子および遺伝子型の変化しない…</p> <p>62 ページ・下から 4 行目： …<u>実験器具</u>や<u>実験者</u>の影響…</p> <p>64 ページ・1～3 行目： …測定結果のばらつきは測定にともなうものではなく、自然界に<u>実在していた</u>。つまり、<u>20 歳の日本人女性の平均身長は実在するのである</u>。…</p>	<p>35 ページ・コラム下から 4 行目と 2 行目： …<u>生命の樹</u>仮説…</p> <p>46 ページ・コラム 7～8 行目： …それぞれの遺伝子の頻度が p と q であるとする (<u>ただし、$p+q=1$</u>)。…</p> <p>47 ページ・コラム 2 段落目： …このように世代を通して遺伝子<u>頻度</u>および遺伝子型の<u>頻度</u>の変化しない…</p> <p>62 ページ・下から 4 行目： …<u>測定器具</u>や<u>測定者</u>の影響…</p> <p>64 ページ・1～3 行目： …測定結果のばらつきは測定にともなうものではなく、自然界の<u>出来事に関するものであった</u>。…</p>

<p>64 ページ・11 および 13 行目： …人…</p> <p>65 ページ・図 2.2 タイトル： <u>ピアソンによるゴールトンの分布解析の説明図</u></p> <p>65 ページ・2 段落目： …ゴールトンは<u>生物集団にみられる表現型の分布を、遺伝要因による分布と環境要因による分布に分離させる解析法も考案した。</u>図 2.2 に<u>ゴールトンによる分布の解析方法の概念図を示した。</u>この図は<u>カール・ピアソンがゴールトンの手稿をもとに描いたものである。</u>図 2.2 の (a) と (c) は、<u>正規分布からある一部を取り出すと、その部分も正規分布になることを表している。</u>図の (b) 右のクインカンクスにある A'B' はしきりになっていて、そこで区切ると玉の分布は正規分布になり、さらにそこから玉を落としてもまた正規分布になる。このように、<u>ゴールトンは分布を分離する方法を用いて、遺伝要因による分布の変化を表す法則を突き止めようとした。</u></p> <p>65 ページ・下から 2 行目： …背の高い親からは背の高い<u>息子</u>が生まれる傾向にある…</p> <p>75 ページ・10 行目： …この集団に対して…</p> <p>78 ページ・下から 3 行目： …そのとき進化現象が決定論である…</p> <p>84 ページ・下から 9 行目： …<u>社会行動の進化</u>に関する…</p>	<p>64 ページ・11 および 13 行目： …ヒト…</p> <p>65 ページ・図 2.2 タイトル： <u>ゴールトンによる分布解析の説明図</u></p> <p>65 ページ・2 段落目： …ゴールトンは<u>分布の計算方法も考案しており、図 2.2 にその概念図を示した。</u>図 2.2 の (a) は、<u>上部の分布が下部の分布を足し合わせたものであることを表している。</u>図の (b) 右のクインカンクスにある A'B' はしきりになっていて、そこで区切ると玉の分布は正規分布になり、さらにそこから玉を落としてもまた正規分布になる。<u>下部の正規分布は、A'B' で縦に区切られたそれぞれの分布を足し合わせることで形成される。</u>図の (c) は、<u>縦に区切られた一部の分布から正規分布が形成される様子が描かれている。</u>このように、<u>ゴールトンは生物集団にみられる表現型の分布が、遺伝要因による分布と環境要因による分布を足し合わせたものからなると考えた。</u></p> <p>65 ページ・下から 2 行目： …<u>彼は、</u>背の高い親からは背の高い<u>子</u>が生まれる傾向にある…</p> <p>75 ページ・10 行目： …この集団に対して、<u>集団内で</u>…</p> <p>78 ページ・下から 3 行目： …そのとき進化現象が<u>決定論的</u>である…</p> <p>84 ページ・下から 9 行目： …<u>社会的な行動の進化</u>に関する…</p>
---	--

<p>94 ページ・1 行目： …じつは娘…</p> <p>105 ページ・下から 3 行目： …<u>利他的な</u>形質は平均適応度が高かった…</p> <p>153 ページ・図 5.6 タイトル： 発生<u>のカナリゼーション</u></p>	<p>94 ページ・1 行目： …じつは<u>自分の子ども</u>…</p> <p>105 ページ・下から 3 行目： …<u>普及した</u>形質は平均適応度が高かった…</p> <p>153 ページ・図 5.6 タイトル： 発生<u>地形</u></p>
--	---

*以上、3 刷修正済み

修正前	修正後
<p>24 ページ・下から 5 行目： …30 年後の <u>1897</u> 年</p> <p>65 ページ・図 2.2 タイトル： ゴールトンによる分布<u>解析</u>の説明図</p>	<p>24 ページ・下から 5 行目： …30 年後の <u>1889</u> 年</p> <p>65 ページ・図 2.2 タイトル： ゴールトンによる分布<u>計算</u>の説明図</p>